

「その人」の全体像を

立体的に考えるということ

村田 愛

理解されずに月並化してゆく「自己決定」

この何年か教育や福祉に限らず政治の世界でも「自己決定」や、「主体性」の大切さについて語られることが増えたように思います。もう、それらの言葉が日常的に使われ一般的にも通じている錯覚におそわれま

す。「自己決定」や「主体性」という言葉が容易に使われているけれど、実際その言葉の意味について本当に理解されているのでしょうか。通じているような気がしているけれど、その意味や内容の共通理解は、どの程度できているのでしょうか。「思想レベル」や「行動レベル」として本当に受け入れられているのでしょうか。都合よく、今の風潮としてその言葉を使い分けているだけではないのでしょうか。

今年（二〇〇三年）の四月一日より、支援費制度が始まり障害を持つ人を取り巻く福祉制度は、ひとつ大きく変わりました。ヘルパー資格を持つ人が、高齢者だけではなく障害のある人もケアするようになりました。自明のことですが、高齢者へのホームヘルパーは「高齢者」への介護を専門に学び、行ってきた人達です。「障害者」とは接しなかったという人達がほとんどなのです。「人」へのサービスですから、高齢者でも障害を持つ人でもその土台となる考えや姿勢は共通するものが多いかとは思いますが。ホームヘルパーを派遣する各事業所では、支援費制度参入にむけて障害を持つ人への対応・ホームヘルプについて自主勉強会が多く行われたようです。

その種の自主勉強会に参加した人から聞いた内容に私はショックを覚えました。勉強会では、障害を持つ人へサービスを提供していく為の“心構え”として「障害」についての本を読んだり、障害を持つ人の生

活を映し出したビデオを見たり、作業所で働く指導員の人から話を聞いたりしたそうです。

勉強会の中では、サービス利用者（障害のある人）の「自己決定」と「主体性」の大切さも触れられたといえます。その指導者も常々利用者の「自己決定」「主体性」を尊重し、その人それぞれの「自立」を援助していくことこそ、ホームヘルパーにとって一番大切なサービス提供の姿勢だと説いていたそうです。サービスの利用者が主体的な立場であることが大切であり、その人がどの様なサービスと内容／方法を求めているかを考えていくことが重要だということを話し、そして最後に質疑応答の時間になったそうです。その時、参加者（ヘルパー）の一人が、「障害を持つ人とは関わったことがないけれど、あと二ヶ月もすれば



ば、障害を持つ人のヘルパーとして働くことになって
います。特に知的障害のある人との関わりを考える
時、どのように関わっていけばいいかわからない。相
手のニーズに合ったサービスをというけれど、果たし
て相手のニーズを自分達は理解することができると
か。そして、こちらの意思・意図を相手に伝えること
ができるのか」と質問したそうです。そこで、そのヘ
ルパー達の指導者に当たる人が、こんな言葉を返した
そうです。「愛の手帳（療育手帳）で知的障害が一度
（最重度）と認定されている人の場合、よくて二、三
歳くらいの知能しかない人達なのです。あなたは二歳
の子どもに難しいことを伝えようとは思いませんよ」
と答えたそうです。そしてその勉強会は終わりの時間
になったそうです。

この話を聞いた時、私は血の気がひいていくような
感じがありました。

知らないから教えて欲しいと質問した人の心の中

に、その「答え」がなんの違和感もなく浸透し、もし
かしたら、その勉強会から持ち帰ったものは、その
「答え」だけだったかもしれません。だからこそよけ
いに、その指導者は恐ろしいことをしたと思います。
指導者という立場にある人はその場では力があり、時
にはその人が述べることが聞いている人にかんりの影
響を及ぼします。ある程度の情報や経験がなくては、
その場での情報に対して矛盾や違和感さえ持たずに、
純粋にそんなものかと思ってしまうこともあると思っ
ます。

私はこの指導者が説く利用者の「自己決定」「主体
性」の尊重が、どれだけ意味あるものとして実行され
ているのか疑問を抱かずにはいられません。その人が
生きてきた人生、数々の経験、その人を取り巻く環境
に思いを馳せることなく、ただ二、三歳程度の知能し
かない人なのだと思いつけて接している相手の自己決
定を、どこまで本当に考えられるというのでしょうか

か？ この指導者は「最重度の知的障害Ⅱ二、三歳」と返答したことによって、自身がモットーとしている利用者の自己決定や主体性の尊重を自ら打ち崩してしまつたように私は感じました。

人の捉えかた／あり方

「障害」という言葉には、社会的に固定観念や差別、そして先入観を持たせる要因があるように感じてしまいます。それをできるだけ無くしていくことが福祉に携わる人間の大きな役割だと私は考えています。実際に障害を持つ人と関わり、固定観念や差別や先入観を、実体験をもつて否定していくこと、「その人」のあるがままをまわりの人達が再認識していくきっかけづくりを日常生活の中でしていくことが重要だと思えます。

ところが、その勉強会の指導者という立場を持ってその人が、何もわからないので教えて欲しいという人

に、ある固定観念を強く植え付けてしまつたように感じるのです。その人の答え、「最重度の知的障害Ⅱ二、三歳」こそが差別や偏見を生む根源と考えられると思えます。

なぜなら、知的障害があるということで「人」をひとくくりを考えることを促すような返答をしたからです。人をひとくくりになると、「その人」のことが見えなくなるでしょう。ひとくくりにするということとは、知的障害が「その人」の全体像を見えなくする壁となり、「その人」はその壁の後ろ側に置かれてしまっています。そして、その指導者の返答は、その壁を分厚くしてしまつたかのようです。

知的障害があろうと無かろうと、それぞれの人達にはそれぞれの個性と人格があることは言うまでもありません。そして、知的障害がある人にもあたりまえですが、「その人」が生きてきた歴史があります。二十歳を超えた人にも、それだけの経験があり、その間に

育ってきた人格、関係、価値観、社会性があり、もちろんプライドもあります。その人が知的障害をもっており愛の手帳に最重度と認定されているからといって、まわりの人が三歳児のように「その人」に関わったらどうでしょう。それで「その人」と健全な関係が築けるわけではありません。

ポジティブサポートは、固定観念や先入観に縛られることなく、「その人」はどんな人かを考えながら、「その人の全体像」を捉え直していきます。ここでは、人の全体像を捉え直すことの重要性や、それをしていく土台となるポジティブサポートのセッション（実際）のあり方を紹介します。

ポジティブサポートの特徴的な部分

ポジティブサポートでは、まず、第一に可能性と個性に焦点をあわせてセッションを行います。その中

で、対象となる人の多面性を見つめ直し、その全体像を認識することから始めます。すなわち、その人が置かれている現在を捉え直していく過程・作業を大事にしていきます。

第二に、「その人本人」の参加に重きをおきます。「その人」のことや「その人の生き方」を考え、将来ヴィジョンを創るということは、その人本人にとって重要なことであり、その人の思いや望みが尊重されるべきものだと思えるからです。ポジティブサポートは、自主参加が基本なので、参加の強制はしませんが、セッションを行う場所・時間帯などを考える時、どうすれば「その人本人」が参加しやすいか、ということをまず考えます。

第三に、参加者全員が対等であり、尊重される場です。ポジティブサポートの場は、話し合う場でも意見を言い合う場でもありません。つまり、参加者の発言は誰かに何か言われることや質問される場ではありません。

せん。だからこそ、対等な場ができ、それぞれが安心して発言できるとも言えるでしょう。そういう形で参加者全員が尊重されます。

ポジティブサポートの踏む段階／過程

ポジティブサポートにはいくつかの段階があります。まず、「その人の立場に立ってみる」ことから始まります。そして、その人の置かれている現実を見直すところから始まります。実際は、その人にとって現在のその生き方がどんなものか、その人にとっての生きる意味における優先順位はどんなものなのか、その人が何を必要としているのか、どうしたらその人にとってより満たされるものになるのかを、その人本人と一緒に考えていくものです。そして、このセッションを続けながら、「その人」にとって望ましい将来のビジョンを、「その人」を含む参加者全員で構築し、共有していくことを目指します。

ポジティブサポートのセッション

実際のポジティブサポート（セッション）の行われ方としては、その中心となる人に関わる人達が「その人」と共に集まり、輪のように席につきます。そして、セッションが始まります。まずファシリテーターが課題を提示します。その課題は、具体的なその人の現実に関ざったもので、例えば「○○さんが好きなこと・得意なこと」、「○○さんが嫌なこと・苦手なこと」とか、「○○さんが選択していること」・「他の人が選択していること」といったものです。このような課題に基づいて、その人の視点に立って参加者がひとり一人順番に発言していきます。つまり、セッションの場で、参加者は自分のその人とのかわりや生活を振り



返ります。そして、それぞれの立場で育んでいる関係から見えてくることや感觸を、言葉にしていくのです。発言の一つ一つは、壁一面に貼られたカレンダーサイズの紙に、書記によって書き出されていきます。また、異なる立場・関係から見た他の人の発言も聴くこととなります。その中で、参加者は新たな視点に気づいたり、自分の考えを捉え直したりし、対象となるその人の全体像が広がりを持つて見えてきます。こういったセッションの過程を土台として、その人の現在と将来を繋げ、能力や可能性を生かした将来のヴィジョンを本人と参加者が協力して作り上げていきます。

ポジティブサポートを継続する意味

先に述べたようにポジティブサポートにはいくつかの段階があり、それぞれの段階をセッションを継続することで、ていねいに行うことに意味があると考えま

す。その人から見えている現実が周囲の人達が知っている現実と違うことや、その人との関係性における距離感が見えてくることも多いようです。各セッションで浮き彫りになるその現実とその意味合いを捉え直すことにポジティブサポートを継続する意味があると考えます。

ポジティブサポートが目指していること

ポジティブサポートは、「自己決定の促進」と「尊重しあい共に生きる」ことを目指しています。誰でも、自分の人生に「自分が生きている感覚」を持つことが必要です。例えば、共同生活の中で限られた選択肢しか存在しないように見えても、その選択肢を知らされているのと知らされていないのでは大きく違います。ポジティブサポートは、「可能な限り「選ぶ」感覚を大事にすることと、望ましい選択肢を少しでも多くつくり出していく環境づくりに力を発揮できると思

います。

その人の全体像

人にはそれぞれ個性があり、それぞれの夢があり希望があります。ポジティブサポートは、それらが尊重されそれぞれの人が「自分らしく生きている感覚」を持てる環境づくりを目指しています。「その人らしく生きる」ということを考えるには、共に生活を創る人々のその人に対する理解が、「その人の全体像」にできるだけ近づいていくことが不可欠だと思います。そして、それはその本人にも同様だと思います。また、自分のことをまわりの人達がどのように理解しているかを聴くことで、自分をより理解できる場合もあると思います。

できるだけそれぞれが持つ枠をはずし、フィルターをはずし、その人を理解したいと思う気持ちを持ってその人に接することでもうすに関係は変わっている

でしょう。つまり、セッションの中で、すでに関係は変わっていると考えられると思います。変化し続けるその人の現実を共に認識しながらセッションを継続するということは、それこそ現実を将来につなげる行為、現実から将来へ共に歩んでいると言えるのではないかと思います。

私が考えるポジティブサポートの魅力は、人、そして関係性は、変わり続けることが自然だということが土台にあるように感じます。それぞれの個性を大切にしその人の全体像を立体的に考えていくと、自然とその人の夢や希望が叶えられる生活をまわりの人達も望み、実現することに気持ちが向けられるようになります。セッションを行っていて私は感じます。そして、人の夢も希望も、時が流れると共に変わります。実際に、それらが叶うことよりも、それをまわりに受け入れられることに、人はまず喜びを感じる存在であるように思えます。

(ポジティブサポート研究室主宰)